



Title	屏風歌の研究
Author(s)	田島, 智子
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44570
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文について <a> をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 ^た田 ^{じま}島 ^{とも}智 ^こ子

博士の専攻分野の名称 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 第 1 8 8 5 6 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 16 年 3 月 25 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第 4 条第 2 項該当

学 位 論 文 名 屏風歌の研究

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 伊 井 春 樹

(副査)

教 授 後 藤 昭 雄 教 授 奥 平 俊 六

論 文 内 容 の 要 旨

屏風歌が流行して一般に詠作されたのは、9 世紀後半から 11 世紀半ばまでの、わずか 150 年余の期間であった。そこに登場する歌人たちが、二度にわたって整然と交替しているのに着目し、屏風歌の盛衰を大きくは三期に分けて考察する。第一章「屏風歌の社会的状況」は六節、第二章「道長と屏風歌」は三節、第三章「屏風歌の表現」は五節、第四章「屏風歌の題材」は三節、第五章「屏風の実態」は二節、それに「序章」と「終章」が加えられ、400 字詰原稿用紙に換算するとおよそ 900 枚ばかりの、屏風歌の総合的な研究論文である。これ以外に、屏風歌の現存する限りの詳細な「資料編」が添えられており、219 点の屏風歌について、成立年、題材、詞書、歌、他本、さらに研究文献を加えるなど、貴重な資料の集成となっている。

第一期は貫之を中心とする古今集時代、第二期は村上天皇の名所屏風に始まり、元輔、能宣、順などの後撰集時代、第三期は長保元年の彰子入内屏風が転機となった、道長を中心とする公任や高遠などの活躍した拾遺集時代である。このような史的展望のもとに、第一章では屏風歌の依頼主の視点から分析し、天皇から摂関家へ変遷していく様相をたどる。とりわけ「長保元年彰子入内屏風」の成立と歌人の考察、その折に詠まれた長能和歌の発掘、それが道綱の代作であったとするなど、新見に富んだ内容である。第二章では道長と屏風歌のかかわりについて、具体的に「寛仁二年頼通大饗屏風」をとりあげ、古記録などから成立の背景を考察する。権力者としての道長の、屏風歌利用の巧妙な方法として、題材の選択、屏風絵の製作、歌人の選択など、その規模の大きさと政治的な意図を読み取る。

第三章では屏風歌表現の時代的な特色を、古今集時代から拾遺集時代にいたるまで、「鷹狩」「子日」「ももとせ」「よろづよ」「草木」「水に映る影」の、具体的なことばを対象として考察していく。古今集時代においては、屏風歌特有の新しい題材を詠むことが求められ、歌は絵とともに鑑賞されていたものの、時代を経るにしたがい、絵をともしなくても理解できる、明白な内容となってくる。とりわけ、屏風歌の多い貫之歌について、その発想や表現の分析に意欲的に取り組んだ方法を明らかにする。第四章は、「松」「鶴」「竹」や「滝」の表現を通史的に追い、屏風歌の題材が後の歌合に取り込まれていき、歌題が豊かになっていく実態を述べる。第五章では、屏風と障子のあり方として物語に用いられる様相を分析し、女性にとっての必需品であったこと、拾遺集時代になると屏風から障子が多くなり、やがて屏風歌も衰退していくさまを論じる。また、屏風歌の詠作において、歌人が屏風絵を見たのか、説明の詞書によるのかについても、旧来の説を糺そうとする。

論文審査の結果の要旨

屏風歌は、和歌形態のうちでも特異な存在で、平安初期から中期にかけて短期間に流行しやがて廃れてしまったこと、屏風という絵をとまって詠まれたことなどから、和歌史にとっては避けて通れない課題として考察され、研究の蓄積も多い。論文申請者は、別冊資料編にまとめているように、219点の屏風歌を詳細に分析し、そこから詠作者の消長によって3期に分け、時代相における広がり、通時的な考察をしていく。きわめて正統的な方法を用い、それぞれの屏風歌の成立した時代背景、古記録類や関連する和歌資料を精査し、そこに用いられた和歌表現の使用法など、先行研究を継承し、批判しながら自説を展開し、数多くの新しい説を導き出す。例えば、従来はとかく屏風歌の詠者とか和歌表現に注目してきたが、屏風の製作、歌人への和歌の注文主という視点から通史的に考察し、第一期の前半における天皇や皇族から、屏風の用途の変化にともない、後半期になるにしたがい摂関家・臣下に移譲し、道長のもとに収斂され、やがて衰退するという歴史的な展開を明らかにする。その大きな転機になったのが、道長主催による「長保元年彰子入内屏風」や「寛仁二年頼通大饗屏風」であるとし、その詳細な考証は大きな成果となった。さらに、『雲葉集』に収められる長能の未詳とされた屏風歌が、彰子入内屏風歌であり、しかも道綱の代詠であったなどとする、斬新な考証がなされており、ほかにも題材の時代によって変化していく和歌作品の分析など、きわめて興味深い内容といえる。

資料の整理も確かで、着実な考証とはいえ、屏風歌に参加する、専門歌人とは異なる公卿の和歌の位置づけ、屏風和歌において歌人が屏風絵を属目したのか、たんに詞書によって詠作したのかなど、未解決の課題はまだ残される。ただ、これによって、屏風歌の研究にさらなる前進がはかられたのは疑いなく、学界に裨益するところも大なるものがある。これによって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。